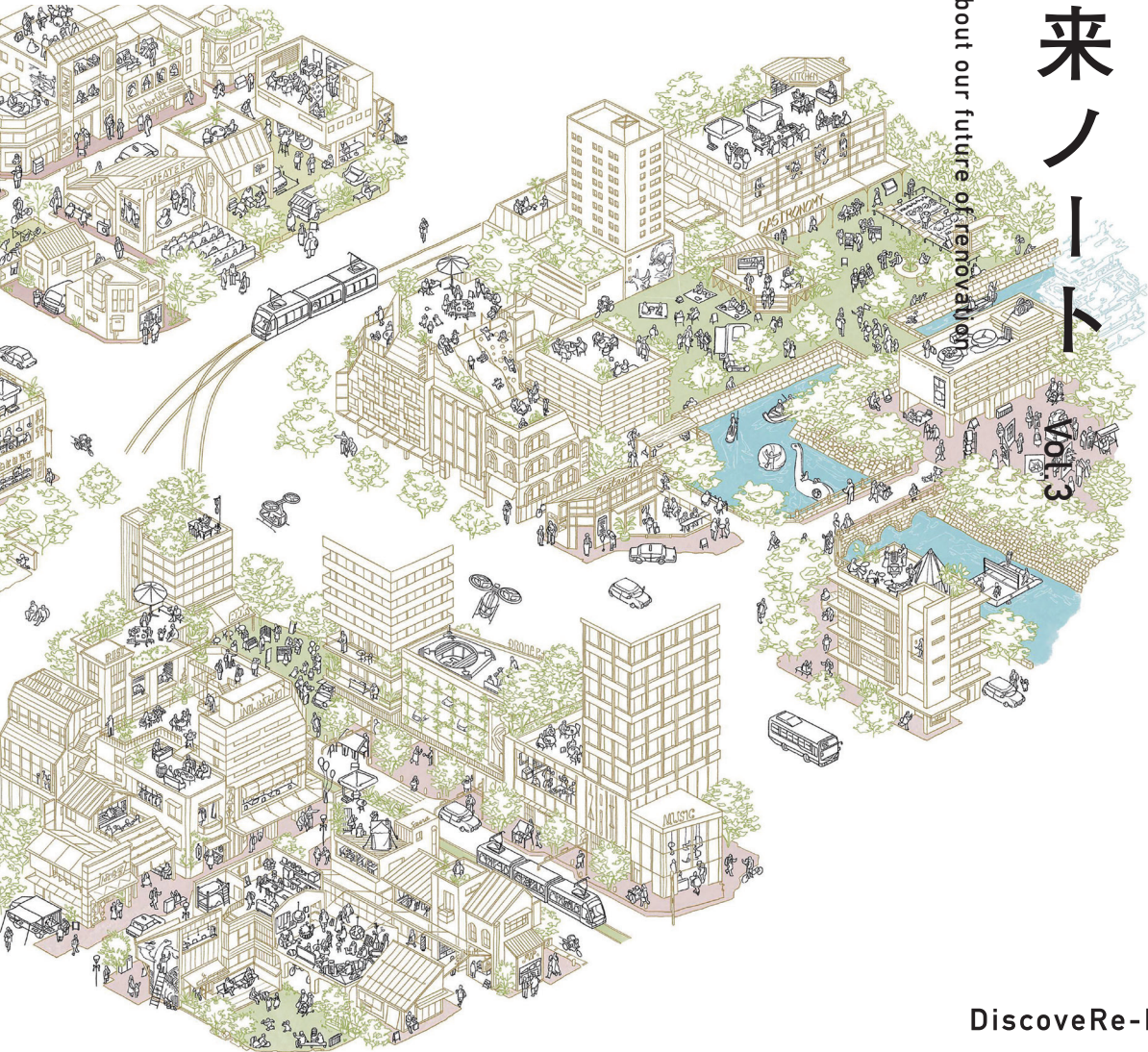


リノベーション

未来ノート

Vol.3

Think about our future of renovation



DiscoverRe-FUKUI

はじめに

福井市中心市街地では、北陸新幹線福井開業を見据え、複数の再開発事業が動き出しています。この機会を捉え、福井市では、再開発とリノベーションが共存し補完し合うことで、他市にない福井独自の個性と魅力を生み出したいと考えています。

2018年からスタートした実践型リノベーションまちづくり講座「DiscoverRe-FUKUI (ディスカバリー福井)」は、エリアリノベーションによるまちなかの活性化を本気で考えると同時に、福井の未来の担い手を育成するため、開催してきました。

今年度は、予定していた講座形式の活動は断念せざるを得ない状況となりました。そこで、改めてリノベーションまちづくりと再開発の補完関係を正しく認識し、まちづくりに知見のある都市人材の方々を交えたワークショップを行い、まちのビジョン(2030年の将来像)の視覚化と共有化に取り組みました。

このビジョンは、福井市中心市街地を4つのエリアに分け、大小のアイデアを織り交ぜ、叶えたいまちの姿を創造(想像)して描いてみたものです。公共空間やデッドスペース、既存ストックを活用することで生み出される、新しいわくわくするような福井のまちの未来の姿。単に建物を更新するのではなく、そこに住む人・働く人・遊ぶ人それぞれの新しいライフスタイルも併せて描いています。あなたはどんな福井のまちを創造しますか？

今、この本を手に行っている方をはじめ、ひとりでも多くの方に福井のまちに関心を持っていただき、共に創造する。それが福井のまちづくりのあり方です。あなたが描くキャンパスの余白は十分にあります。欲しいまちは私たちが創り出しましょう。是非、ご一緒に!!

2021年3月

福井市長 東村 新一

まちづくり福井株式会社 代表取締役社長 岩崎 正夫

DRF2020の取り組み

2030年のまちのビジョンを視覚化するため、2020年12月から約2ヵ月に渡り、オンラインも含めたワークショップでディスカッションを重ね、あるかもしれない2030年のまちのビジョンMAPを作成しました。

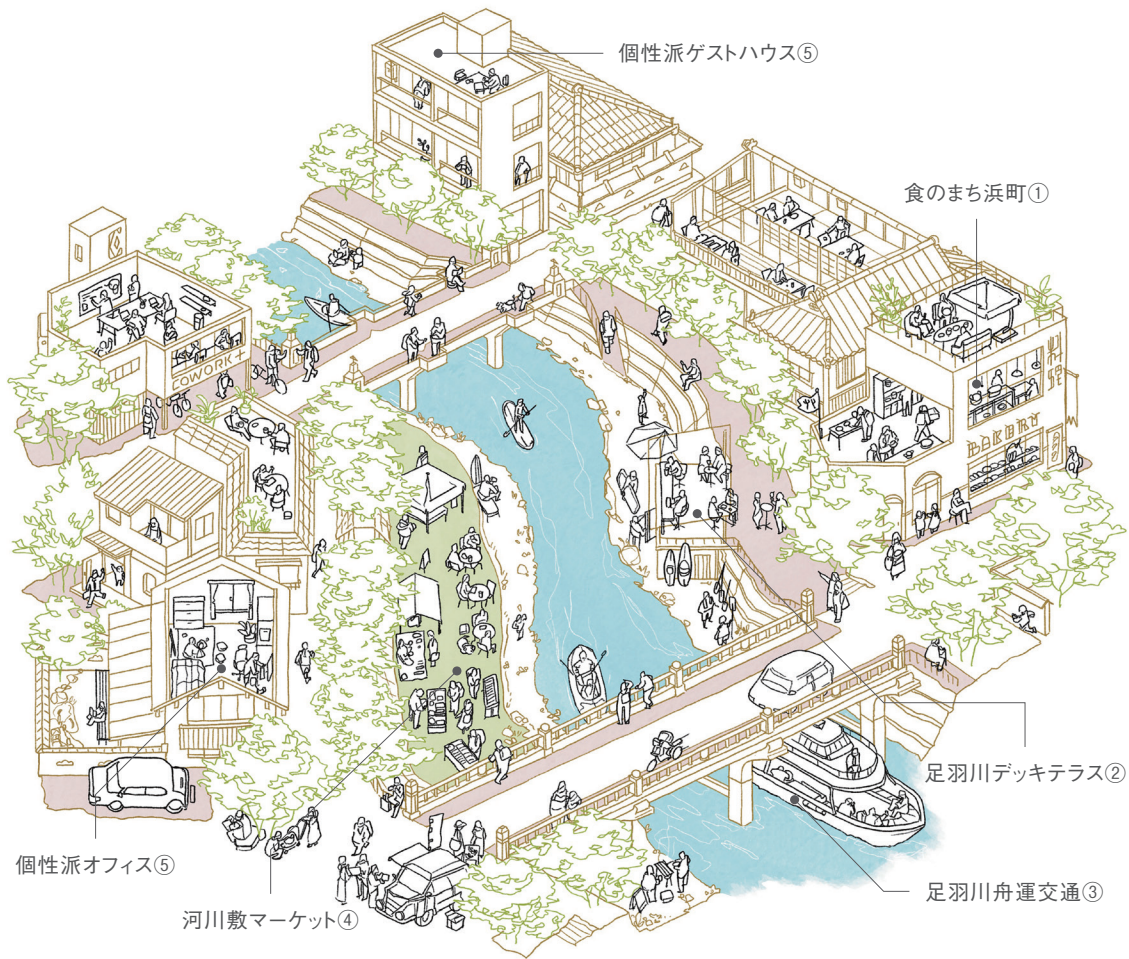
WS参加者	目次
有限会社E.N.N. 代表 小津 誠一(DRFマスター)	2 はじめに
株式会社オープン・エー 代表 馬場 正尊	
リージョンワークス合同会社 代表 後藤 太一	
春蒔プロジェクト株式会社 代表 田中 陽明	—— DRF的2030エリアビジョンMAP
福井県立大学地域経済研究所 准教授 高野 翔	3 足羽川河川敷・浜町エリア
Sanpo Design Office 代表 高岡 勇治	
TSUGI llc. 代表 新山 直広	4 福井駅西口エリア
株式会社ハッカ 高野 麻実	
	5 片町エリア
ビジョンデザイン オノタツヤ	6 福井城址エリア
編集・デザイン	7 キーマンに聞く2030ビジョン
株式会社舎家 松倉 健太郎 牛久保 星子	
	10 あとがき



DiscoverRe-FUKUI(ディスカバリーフクイ)の名前の由来

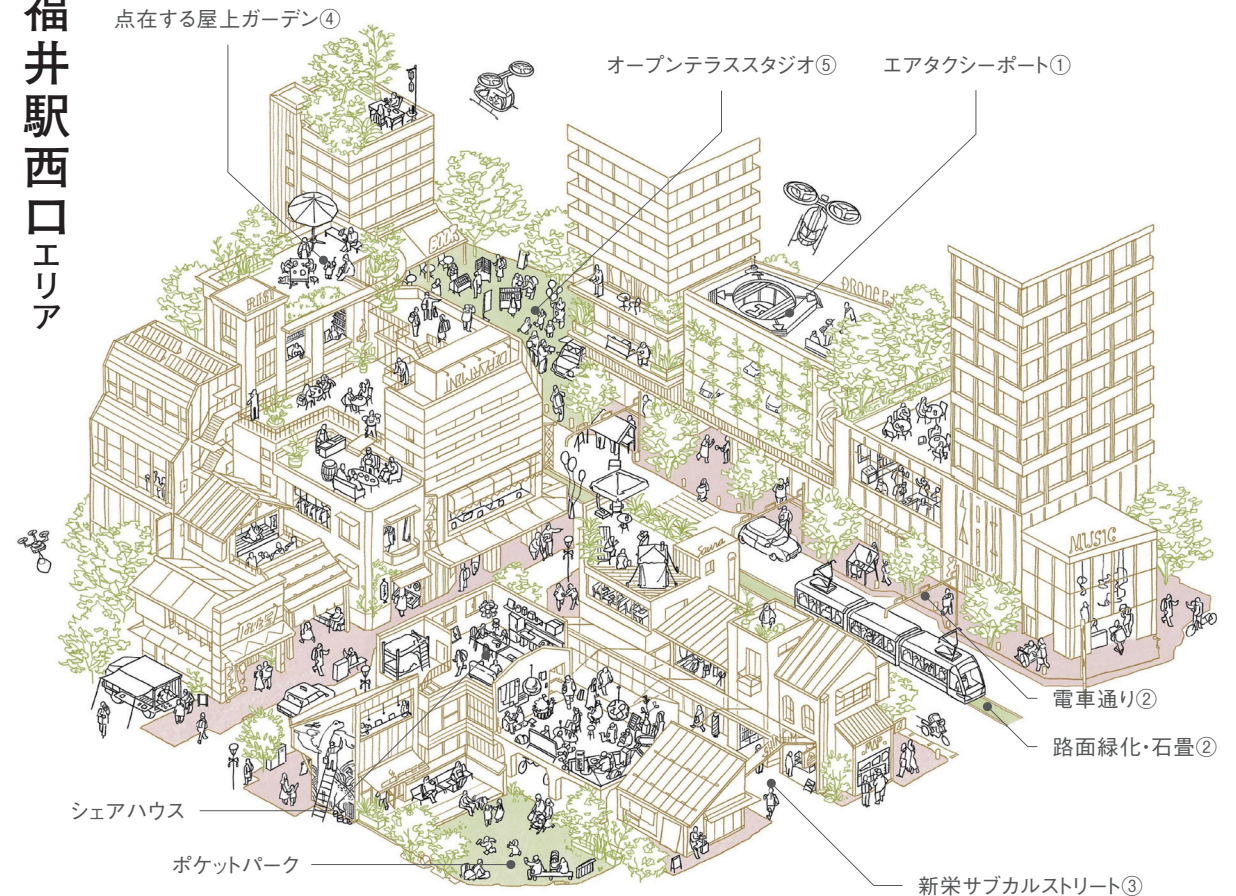
Discover=発見する、Renovation=リノベーション、Re=再び・再生、この3つの意味が含まれている。福井のまち、地域の良さ、魅力を発見し、リノベーションによってまちを再生する思いを込めて、DiscoverRe-FUKUIとした。

足羽川河川敷・浜町エリア



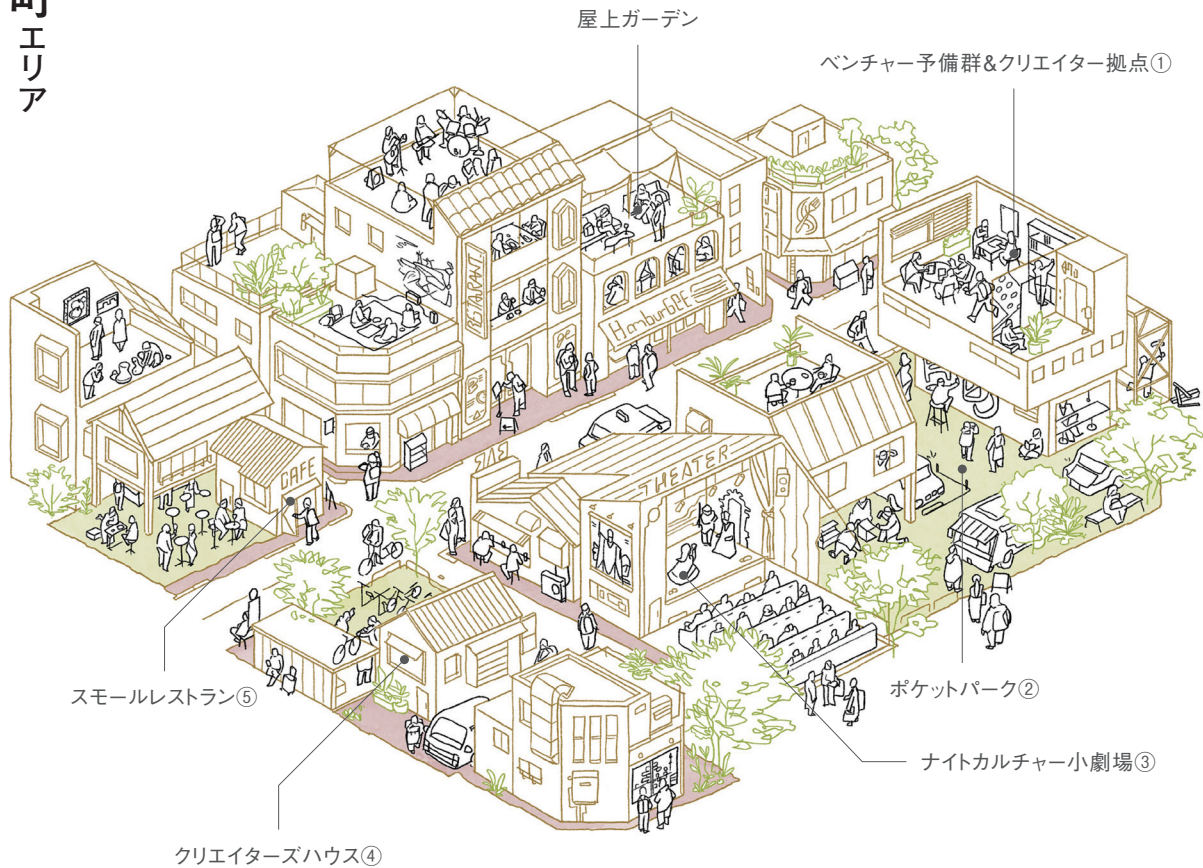
- ① 福井の食材や地酒、伝統工芸品などにこだわる料亭、和食店、専門レストラン、お茶屋など高級飲食店が並び、「食のまち浜町」としてリブランディングされる。
- ② 足羽山や桜並木を見渡すテラス。カヌーやBBQセット、タープテントなどが貸し出される足羽川河川敷アクティビティの拠点にもなっている。
- ③ 足羽川を屋形船や水上バスによる新交通拠点として活用する。
- ④ 河川敷では、仮設マーケットが定期的で開催される。
- ⑤ 足羽川沿いの戸建住宅やマンションは、クリエイターオフィス、シェアオフィス、ゲストハウス、ホテルへとリノベーション。自然に隣接する職住近接のライフスタイル、テレワーク、ワーケーション拠点となる。

福井駅西口エリア



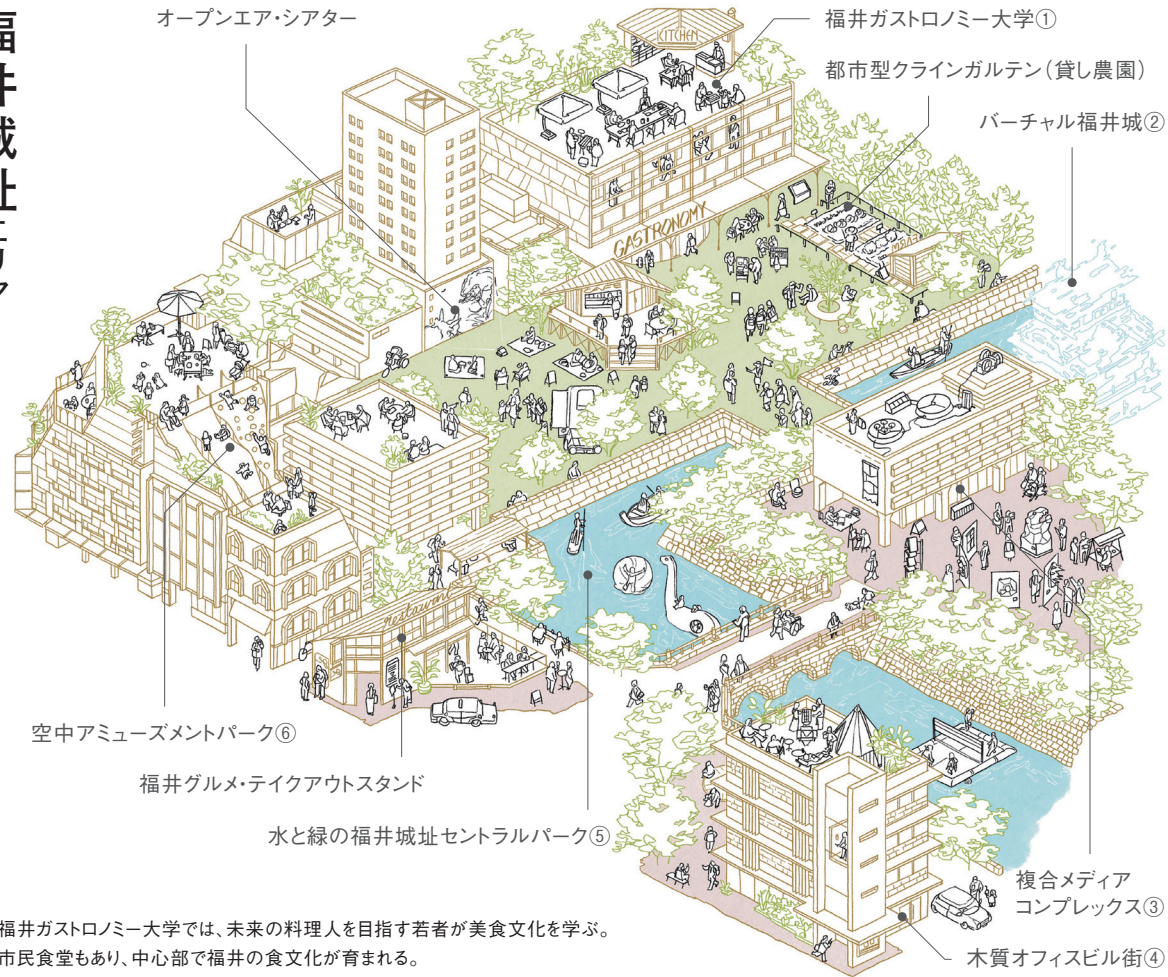
- ① 再開発ビルの屋上では、福井と小松空港を結ぶ空飛ぶタクシー専用発着所が整備され、福井の空路が開通する。
- ② 主要道路の路面は石畳舗装によって車の速度をコントロール。電車軌道は緑化され、歩道は移動式屋台などが並び遊歩道空間となる。色が統一された公共交通車両と共に、福井にしかない道路景観をつくりだす。
- ③ 路地裏とリノベーションカルチャーが渾然一体となった北陸随一のサブカルチャーストリートとなる。店舗やシェアオフィス、シェアハウスなどはクリエイターの拠点となる。
- ④ 小さなビルの屋上や屋根は緑化され屋上ガーデン、カフェ、オフィス、イベントスペースなどが点在し、地上にはポケットパークが点在。再開発ビルから見渡す独特の風景をつくりだす。
- ⑤ 再開発ビルのグランドレベルには、様々なアクティビティやコミュニティの拠点として都市に開かれたスタジオ&カフェが点在する。

片町エリア



- ① 雑居ビルの上層階や裏手の小さな建物群は、ベンチャー予備群やクリエイターが仕事場として活用する小さなリノベーション建築へと再生活用されていく。
- ② ビルの隙間の空き地や駐車場は、移動式屋台などと共にポケットパークとして活用され、横丁的な空間で充たされる。
- ③ 演劇、落語、音楽などの小劇場や映画館といったナイトカルチャー空間が点在する。
- ④ ベンチャー予備群やクリエイターは、職住近接を求めて小さな建物で暮らす拠点をリノベーションしていく。
- ⑤ 古くて小さな建物は、個性派の戸建レストランとして再生活用。

福井城址エリア



- ① 福井ガストロノミー大学では、未来の料理人を目指す若者が美食文化を学ぶ。市民食堂もあり、中心部で福井の食文化が育まれる。
- ② 歴史を感じさせる質感が施された福井城址周辺では、歴史や文化をバーチャルに体験できる夜限定の福井城下町が出現する。
- ③ 旧官庁施設群をリノベーション。図書館・美術館・博物館など様々なメディアがあつまる複合施設群となり、福井県下の各文教施設と連携した情報メディア型の明道館を再興。
- ④ 官公庁やオフィスビル群は、福井県産の不燃化木材でリノベーションされ、新しいオフィス街景観をつくる。
- ⑤ お堀には水辺を楽しむ仕掛けが沢山あり、緑溢れる中央公園や歴史的遺構が散りばめられた福井城址と一体化した、「福井城址セントラルパーク」として整備される。
- ⑥ 大型ビルの屋上には、空中庭園や空中遊園地が出現。ビアガーデンやBBQ設備などもあり、ファミリーからビジネスマンまで楽しむ屋上の楽園となる。

キーマンに聞く2030ビジョン

Day : 2021.2.13
Place : CRAFT BRIDGE

聞き手	話し手
有限会社 E.N.N. 代表 小津 誠一	春蒔プロジェクト株式会社 代表 田中 陽明 TSUGI llc. 代表 新山 直広 福井県立大学地域経済研究所 准教授 高野 翔 atelier-fos一級建築士事務所 代表 青木 一実



小津 今年、ディスカバリー福井（以下DRF）はコロナの影響もあり活動休止状態でした。一方、福井駅前の再開発は進んでいて、今回僕たちは、この未来ノートで少し先のビジョンを視覚化してみました。描いたビジョンは、2024年の新幹線開通のタイミングではなく、もう少し先、2030年の福井です。

また現在、再開発が進む福井駅前で、関わりの可能性を突き放しているのは計画者なのか住民なのか不透明ですが、お互いの距離感が感じられます。僕たちが発言することで、行動を起こすことで、**まちへの関わりしるの可能性**を感じてもらうことができるとするのが、DRFがビジョンを描く目的だと思っています。今回の座談会では、みなさんにそのあたりを念頭において話してもらいたいです。

ではまず自己紹介を兼ねながら。今ここ福井にいて、福井駅前で起きていることに対する想いもあればお願いします。

青木 建築事務所を主宰しています。私は家族都合で5年前に福井へ来ました。その前に住んでいた岐阜も夫の職場が岐阜だったから暮らして、その時、まちに自分から積極的に関わらなかつたんですね。それは自分の環境の変化もあるし、地理的なこともあったんですけど。いざ福井に転居して、岐阜を知るとしていなかったことに気が付いたんです。職業として建築をやっているのに、まちのことに興味を持たなかつたなど。建物もそうなんですけど、それを含めた人の活動とか全然無頓着だったなという反省があります。

子どもが3人いて、一番下がまだ3歳なので、まちづくりの大切さも分かるけど、関わる大変さも分かるので、**バランスを取りながら関わられたら**と思っています。

小津 青木さんのFacebookはやんちゃな息子さんたちの話が中心で、とても面白いですよ。

青木 Facebookは目的があって福井に来てから始めました。もし仮に自分がいなくなっても、周りの大人がちょっと気になるという関わり方を作っておきたいと思ってやっているんです。

高野 3か月前に、福井に帰ってきました。今、福井県立大で、地域づくりの研究や実践をしています。ライフワークとしては、平仮名のまちづくりを10年程やっていて、まちづくりと都市計画の間みたいなことにすごく興味があります。

私自身はこの福井駅前の再開発に対して、まちに市民が関わることはできないのだという**あきらめの象徴**になることは**絶対に嫌**だと思っています。その上で、前向きに少しでも関わっていきたい。**子どもたちが将来こういうことをやってみたい**

と思えるような空間であってほしいし、自分の好きなことを表現できる場になってほしいと思っています。

小津 高野さんは「福井人」の発起人ですよ？

高野 魅力的な人を紹介する観光ガイド「福井人」を作りました。この本をきっかけに色々な仲間が広がったと思います。作成当時は、JICA（国際協力機構）に所属してアジアやアフリカの国々などを飛び回っていたので、通いで福井に来ていました。私は、途上国政府の同世代のみんなと話すうちに福井について帰ろうと思えました。彼らが国を切り盛りしているのを見て、自分も自身の大事な場所に向き合いたいと感じたのがきっかけです。

新山 鯖江市の河和田でTSUGIというデザイン事務所をしています。大阪の吹田というニュータウンに生まれ育ちました。美大の建築科だったんですが、その時に河和田アートキャンプに参加したのがきっかけで福井に来ました。ものづくりの鯖江で、自分はこのまちに対して何ができるか考えたことからグラフィックデザイナーになりました。

福井駅前というか、福井に対するモチベーションっていうのが僕は大きく3つあります。

1つはシビックプライドの形成。福井めっちゃいいよなってみんながなってほしいと思っています。2つ目が同世代で動きたいという思いです。今やっている駅前再開発の仮囲いプロジェクトもそうなんですけど、極力同世代の面白い人たちと関わる余地をつくらうというのをすごく意識しています。あとは、自分の娘が今1歳4ヵ月で。僕が関わったまちで娘が**青春時代**をいい感じに過ごしてほしいというのが3つ目の動機です。

小津 最近、福井駅近くに引っ越してきたんですよ？

新山 はい。去年の9月に引っ越しました。余談ですけど、目の前が川沿いで眺めがすごくいいんですよ。引っ越して同じマンションの人に挨拶に行った時に「ここいいでしょ」って言われたんですよ。その言葉にすごく救われたというか。同じマンションの方もこの場所を気に入って住んでいるという、その事実が嬉しかったです。

田中 東京で春蒔プロジェクトという会社でco-labというクリエイター向けのコワーキングスペースと、クリエイションのドゥータंकをやっています。僕は福井出身で、高校生の頃、福井のまちなみに物足りなさを感じて、それこそ駅前の勝木書店へ行ってデザインや建築の本を見て、風景を変えたいと考え、東京の美大の建築学科に進学しました。そのまま東京で大手のゼネコン設計部に就職して、品川駅とか都市のインフラのデザインをしていました。その当時、インター

ネットが創世期で、世界が根本から変わるなと思って2年早々に辞めてインターネットに特化した大学院に進み、コミュニケーションをデザインすることにし、ハードからソフトのデザインに大きく転換しました。

2003年にフリーランスのクリエイター専用のシェアオフィスの企画運営を始めて、それが今もやっているco-labです。当初はリノベーション物件で展開していたのでその分野で紹介されることも多かったんですけど、そのうちにゼネコン出身ということもあってか、都市再開発でのデザインやブランディング・ディレクションに関わる仕事が来るようになりました。その施設にco-labとして入居し、再開発後の施設運営も見据えた運営者側として、建物のブランディングのイベントを行ったりするなどして、生きた建築にするために関わり続けることを行っています。

小津 福井駅前の再開発にも関わっていますよね。

田中 はい。施設開発やデザインのコンセプトつくる役割とco-labとして入居インベーションセンターを運営する立場です。コンセプトづくりは**建物に魂を込める**ことを早めに行っておいたほうが良いと思って受けました。**再開発とリノベーションは共存すべき**だということを実証したいなと。僕は今回、再開発側の立ち位置で、この2者の共創は開発側にリノベを理解する人がいないと成立しないのですが、今回は僕の役回りなのかと捉え、リノベーションや市民との関わり方を考えています。地元福井だからその役割が生きてと感じているのかもしれない。

小津 ありがとうございます。みなさんの自己紹介の中に、僕が伺ってみたいことのヒントが散りばめられていたので、質問をしながら進めていきたいと思います。まず、青木さんに、**僕らが描く未来の絵は、子どもの未来の現実**であって、子どもたちにとっては、**当たり前**の環境になると思っています。その視点で思う事を聞きたいなと。

青木 子どもは、思いついたことをすぐ行動に移す。まず、その瞬発力がすごいなと思っています。

私の小学校に通う息子の話ですが、ミカンが全部なくなっていて、どこに消えたかと思っていたらミカン風呂になっていたんです。どこかでミカンの効能を聞いて、じゃあミカン風呂を作ってみようという、その瞬発力。あと、川が油で汚れていて、生き物が可哀そうだから友達と川掃除をしてくるって言って、本当に行くんです。ゴミを挟むはさみと、手袋とゴミ袋を持って。ゴミ拾いは大人の物差しで考えると感心することだったんですけど。でも子どもにしたらミカン風呂に入ること、川掃除に行くことも全部一緒なんです。だから大人は見守るだけでいい。そういう風に考えると、**今のまちなかが子どもを許容できるのだから**って思います。

小津 深いなあ。今は、子どもの独創性を育むことをまちが抑制しているように感じるね。僕らが小さい頃は、遊ぶ場所って与えられたテーマパークのような施設じゃなくて、自分で見つける空間だった。でも今は、例えば河原は遊んじゃいけないところと認識されたりしている。遊びの

環境を考えると、独創的な発想の瞬発力が削がれてきている気がします。

青木 このお話をいただいて妄想したんですけど、まちなかに飛び地みたいな学校ができればいいなと思いました。福井って教育がきちりしている。うちの息子の場合は、学校という先生が用意する箱に、大きさも形もいびつで全く入らなかつたんです。そういう子達に向けて、まち全体が学校のようになって、移動式で、今日の理科は古いビルの中で、図工は再開発の一番でっぺんでやったりしたら面白いなあ。

小津 つい自然の中でとか言いがちなんですけど、**子どもだって未来都市や複雑なまちとかに関わる権利がある**と思うんですよね。ケガしたら、そりゃあんたが悪いんでよって怒られて学ぶような、そういう**包容力や寛容性のあるまち**みたいなのがあるといいですよ。

青木 ちょっと話が変わるんですけど。福井って変わっていくことに強烈に拒絶感という不安があるのかなと思っています。逆に言えば、変わらないことに誇りを持っているのかなとも思っています。だから、変わることを不安を感じる人に対して、「これは変わらない」と言ってあげると良いのかなと思います。**変わることと変わらないことが明確**になるといい。

極論、子どもは大丈夫なんです。全然変わる生き物なので、どうにでもなる。例えば子育てしながら変わるのってけっこうしんどいから、その負担を軽減させるのも、みんながまちに関わりを持ちやすくなる一歩につながると思います。

小津 高野さんは、プータンなどの海外も含めて様々なまちを経験していますね。SDGs的な意味だけではなく、**まちが持続していくためには何が必要で、DRFが何を発信すべきなのか**伺いたいです。

高野 広義の意味でサステイナブルディベロップメント(持続可能な開発)ということですね。まずディベロップメントって日本語にすると開発で、我々福井人なら分かりますけど、語源は開発(かいほつ)なんですよ。

一同 あ〜。なるほどね。※福井市に開発(かいほつ)という地名がある

高野 これは仏教の言葉で、自分の中の仏性のいいところを見つめるという自動詞なんですよ。結局、誰かに開発されるのではなく、自分の持っているものを開発する。内発的で自発的な視点なんですよ。そこに持っていくというのがまちづくりや



左から 青木氏 | 高野氏 | 新山氏 | 田中氏

都市計画において大事だなと思います。主語を自分に持っているかという勝負ですね。

また、**サステイナブルの一番の源泉は、人の好きという感情**だと私は思っています。子どもをみると、飽きずに好きなことずっとやっていますよね。あのパワーが生きていない社会っていうのは勿体ないと思っていて、人の好きという想いと行動以上の持続可能なエネルギーはないなと。

だからまずはDRFがディベロップメントを「私の、私が」っていうところに置き換えて活動していけばいい。その上で、**関わる人の好きを引き出し、まちで好きを表現できる舞台を設けていく**ことがDRFの役割なのかなと思います。

小津 すごく明確ですね。

少し話が逸れますが、僕は提案も変化もスピードが全てだと思っていました。それが金沢に帰って、ゆっくりでいいんじゃないかと思うことが増えてきました。特にまちづくりにおいてこれだ!とすぐに飛びついて取り返しのつかないことになっているまちは結構ある。咀嚼して合点がいてハラ落ちなきゃ動かないっていうことも大事だなと。そんなこともお話しを伺いながら思いました。

新山さんに地域の固有性とデザインについて聞きたいなと思います。福井の外からきて、自ら課題を見つけて、勝手に解決しているイメージがあります。

新山 そうですね、実際RENEWって誰にも頼まれていないし、勝手に自分でやりたくて始めたという感じですね笑。デザイン業界は、まだ意匠的なものに終始しているのだと思います。が、デザインの広義自体は本来的にはきわめて建築的なものだと感じています。

国内のデザイナーの半分はインハウスデザイナー(会社に属するデザイナー)です。加えてデザイナーの大体6割が東京、大阪に集中している。だから、地方で独立しているデザイナーってもう天然記念物だと思うんですよ。

僕らは地域で独立して活動するデザイナーをインタウンデザイナーって呼んでいるんですけど、本物のインタウンデザイナーは、まだ福井には数社くらいしかない。インタウンデザイナーは、広義のデザイン視点を持って、その土地を活かした、その土地の課題など、必要なことをすることで、まちのあるべき姿をみつける役割を担うデザイナーと定義づけています。僕の場合だったら鯖江はものづくりのまちなので、ものづくりに必要なことをする。RENEWもそうですね。でもそれが同じ福井でも、越前海岸だったら越前海岸なりのデザインの形があると思っています。

地域の固有性ってすごく大事なんです。地域の企業のブランディングをする際は、いつもその企業の「らしさ」や「強み」を探すことからスタートします。課題を解決するというプロセスもありますが、他方で、いいところを伸ばしていくというプロセスがあります。前言撤回しているようですが、福井の場合、課題がいっぱいあるんだけどそこは一旦無視して、**今いいと思うものをどんどんストレッチしていくことに未来がある**と思っています。

じゃあ、福井駅周辺で**福井の固有性**って何だろうって考えた時に**色々な人たちの顔が浮かびました**。DRFのようなリノベーションと再開発を共存させる動きがあることもそう。もっと言うとな番先にリノベーションの先駆けであるフラットキッチンが生まれて、クラフトブリッジ、サミーズ、クマゴローのように続いていっている。まちづくり福井の岩崎社長の存在もポイント高いですね。しかもそれぞれが割と仲がいいっていうのは、けっこういいまちだなって思っています。色んな地域に行って講演させてもらうんですけど、大体「俺らのまちにプレイヤーがいない」って言われます。でも福井はいるって言える。答えになっているか分からないですけど、福井の固有性ってそういうところだと思います。

小津 田中さんには**再開発のツボ**を聞いてみたい。今回、仕事として関わっている再開発施設の中のイノベーションセンター・リビングラボが、そのツボになりそうな予感があります。

田中 今回関わっている福井駅前の再開発には、コワーキングの運営ができないかと3,4年前に声をかけていただきました。そこで開発のプロセスを見ているとコンセプトもなく進められていることに気づき、その提言をさせてもらうことになりました。日本では都心でも地方でも開発するときに、一番大切なコンセプトづくりをやらないで建物を創るということが起こっています。一度創ると100年くらい残ってしまうにも関わらずです。それって欧米だとちょっとありえないことです。大規模な開発も、ものづくりのひとつだと思うのですが、ある規模を超えると経済分離されて延長上で考えなくなる状況がある。それはまちにとって不健全なことだと思います。

現在、co-labではアーバンビジョナリーというタイトルで大手ディベロッパー4社とクリエイターが未来の都市を考える話す場を立ち上げ、大手ディベロッパーが都市計画の大きな基準をつくる上で、大きなビジョナリーを共有する場を持ちましようという提案で始めました。最初はお互いライバル会社だから様子見だったんですけど、僕らみたいな**クリエイターがニュートラルな立ち位置で潤滑剤の役割**をすることで、今は本音で語れる有意義な議論ができています。福井駅前の再開発もそうですが、利害関係者のぶつかり合いがあると思うのですが、クリエイターを入れることで円滑に結びつくことがあると思うので活用すべきだと思っています。またこの開発でSクラスビルができるので大企業や外資系などが入りやすくなり、新しい知見や資本が入ってくると思います。いかに開発によって入ってくるそのメリットとリノベーションエリアとを融合してその土地に落としこんでいくか、その仕組みづくりがけっこう大事だなと思っています。

つついリノベーション側は大きな開発を悪として、二項対立的な対峙をしてくる傾向をみますが、こういったメリットをうまく利用して変革のチャンスをつくるべきだと思います。そういった中、**オープンイノベーションの場であるリビングラボ**はひとつの手だなと考えています。リビングラボは日本では全然まだ浸透していないんですけど。再開発やまちづくりは自分事で考えなければどうにもならないですから。だから、今回**リノベーションと再開発が連携して動き出**して、まちづくりを考えている人からみれば大変ですけどすごく意義深いことだと思います。この2者が連携しながら開発を行うことにより成功例をつくることができれば、日本での先行事例として注目を浴びるのではないのでしょうか。

小津 この一年、都市や暮らしのことも考えさせられました。**DRFも元に戻ろうとは考えていなくて、更新しながらいききたい**なと思っています。話にも出てきましたが福井は、主体的なプレイヤーに名乗りをあげる人が多い様に思います。それは、まちの規模感からくることなのか、人柄の話なのか分からないけど、DRFの活動が根差し始めている気がします。今日の対談はこれからのDRFの方向性について様々なヒントが散りばめられた時間でした。散らかったまんまなんです笑

田中 これは散らかりの幅が広い。

小津 この散らばりをどう昇華させていくかですね。

あとがき

ディスカバリー福井(通称:DRF)は、2018年より福井の中心部のエリア・リノベーションに取り組む活動体として始まり、今年度で3年目となりました。

しかし、昨春より拡がった新型コロナウイルス感染症の影響によって、スクール事業を中止せざるを得ない状況となりましたが、DRFとしての新たな試みを本号ではお届けすることとなりました。

まず、昨秋、予定していたスクール事業を見送りつつ考えたことを少し記します。

コロナ禍のなか、僕たちが体験したことは、都市やまちが壊滅的に物理的被害を受ける「ブラックスワン」と呼ばれるカタストロフィではありませんでした。にも関わらず、福井はもとより世界中で生活や活動の強制休止や変更が求められる事態に陥りました。それは、目の前の問題を放置した末に壊滅的な問題を生じさせる「ブラックエレファント」の出現だったのではないのでしょうか。今回のような感染症パンデミック、あるいはリーマンショックのような経済危機は、予見可能な課題や問題を放置してきたからこそ起きたと言えます。なかなか本格的に取り組めない地球温暖化問題でも同様の危機感を覚えます。

一方で、僕たちにとっての身近な危機感を考えると、DRFが取り組んできた空き家、空きビル問題に始まる社会的課題をこのまま置き去りにすると「黒い象」という新たな恐竜を福井に呼び寄せてしまうのではないかとこれを今一度、自分事として引き寄せて考える必要があるのではないかと。そんなことを考えた1年でした。

この国では、都市やまちにより多くの人や資本を集めることを前提とした販賣い創出と経済効率をひたすら目指してきました。その結果、全国の駅前、中心市街地や郊外、里山里海ですら、その場所の歴史性や固有性の薄い一様な風景をつくりだしてきました。より早く、より遠くへ、より沢山という、拡大や合理性に絶対的な価値をおいた国家や社会が取り組んできた結果です。その一方で、空き家、空きビルという未利用空間を急増させ、使われない公共空間を残してきたことを僕たちは知っています。

今後、パンデミックが収束するときに、そんな元通りの世界に戻ることを期待すべきではないし、そもそも元の世界は、目指すべき姿とは少し違っていたのではないかと思われます。

「Build Back Better」という言葉があります。僕たちはいつもブラックスワンやブラックエレファントが去ったあと、忘れてきた言葉でもあります。いまこそ、前よりもより良い創造的な世界やまちを目指すべきではないでしょうか？

そのために、DRFが目指すべき姿勢は、原状回復的あるいは対症療法的な態度ではなく、あるべき姿やビジョンを思い描き、あるかもしれない未来のまちの姿を創造する態度ではないでしょか。

そう考えて、DRF2020では、少し先の未来を創造し、目の前のハードルを超えた福井のビジョンを描いてみることにしました。

今回、描いた福井の絵は、完成予想図や未来予測ではなく、あるかもしれない2030年の未来の妄想に過ぎません。だからこそ、この絵の全体像やディテールを眺めながら、あなた自身がイメージする2030年を妄想してほしいのです。そして、あなたが思い描く福井を実現させるために、明日から何をすべきかを考えて欲しいと思います。

DRFでは、創造するあなたにも関わっていただけるような、福井の未来づくりのために活動を続けていきます。

そんな思いをのせて、未来ノートvol.3をお届けします。

2021年3月 DRFマスター / 有限会社 E.N.N. 代表 小津 誠一



発行日 2021年3月
発行元 福井市・まちづくり福井株式会社

